

差別を助長する「泊まり合い」

今後も続ける



みやち ようこ 議員

ている。地区外から入ってきた人、地区外へ出た人も被差別地区の人になる。

問 「泊まり合い」は地区内、外の住民が泊まって親睦を深めるとして続けているが、参加者は何人か。

答 同和対策の特別措置法も終わっているのに、何を基準に住民を地区内、地区外と分けているのか。

答 松本 住民課長

参加者は54人。内訳は町職員等41人、一般住民の内、地区内7人、地区外3人となっている。

住民は属地属人主義で分け

問 では、誰の子であるかが問題となる。行政は生まれや住んでいる地域で住民を区別しているが、これこそ行政が最もやってはいけないことで、これこそ差別ではないか。なのに税金を使って続けているのが泊まり合いだ。中止を求めると住民の声は大きく、数年前から住民参加が激少なのがその証拠だ。行政だけが時代に取り残されている。それを象徴するものが役場玄関横に掛けられている「大方町部落完全解放宣言」である。

答 泊まり合いの中止と「宣言」の取り外しを求める。

答 大西町長

部落差別は解消の道にはあるが、住民意識に根強く残っており、今後も実施する。

医療費

中学卒業まで
無料化は吉報
入院、通院全額
助成する

問 子供の医療費を15歳まで拡大するように、数年前から求めて来た。今回やっと実現するという。町民は国保税も値上がりし大変だが、子供だけは安心して病院にかかることが出来る。遅すぎたが歓迎すべきことだ。具体的な内容と財源は。

答 矢野 健康福祉課長

中学卒業まで、入院、通院費を全額助成する。財源は過疎法の改正により、過疎債で対応できることになった。

地域医療

四万十市民病院へ
援助を
注視したい
経過動向を

問 幡多の国保病院として誕生した四万十市民病院だが、利用者の2割は黒潮町民だ。夜間10時以降の救急医療はけんみん病院に頼っているが、これも飽和状態と聞く。けんみん病院は距離も遠く命にも影響する。

採算性だけで運営をしていない公立病院は、災害時にも大きな役割を果たすが、全国の公立病院の8割は赤字だ。地域医療を守る立場から、幡多周辺自治体で援助は出来ないか。黒潮町がその先頭に立って欲しいがどうか。

答 大西町長

改革プランの策定等々経営改革に努力されてきたと認識しているが、設置者が四万十市であり、現段階では、その経過動向を注視していきたい。



本庁舎役場玄関横に掲げられた「大方町部落完全解放宣言」